



伊豆諸島鳥島のアホウドリ、1万羽以上に回復！ 準絶滅危惧種へのダウリストに向け保全施策の継続が不可欠

- ・ 2026年2月から3月に行った調査の結果、ヒナは1,591羽を数え、鳥島のアホウドリ個体群は11,067羽と推定されました
- ・ 1951年のアホウドリ再発見後、これまでの保全活動により初めて1万羽を超えました
- ・ レッドリストの準絶滅危惧種へのダウリストまでは今後も継続したモニタリングや保全活動が必要です

●伊豆諸島鳥島のアホウドリの推定個体数

2026年2月から3月に鳥島で実施された、アホウドリ繁殖状況のモニタリング調査の結果、鳥島のアホウドリ個体群は11,067羽と推定されました。一度は絶滅したと考えられたアホウドリですが、1951年のアホウドリ再発見後、はじめて1万羽を超えるまで回復しました。

- ・ 鳥島全体で2025-26年の繁殖期に確認された総ヒナ数は1,591羽でした。
- ・ 繁殖に参加しているペア数は2,114ペア（4,228羽）、非繁殖個体（6歳以下の若鳥）は5,248羽とそれぞれ推定されました。
- ・ 昨年からの増加率は12.1%、過去15年間の平均増加率は9.2%となりました。

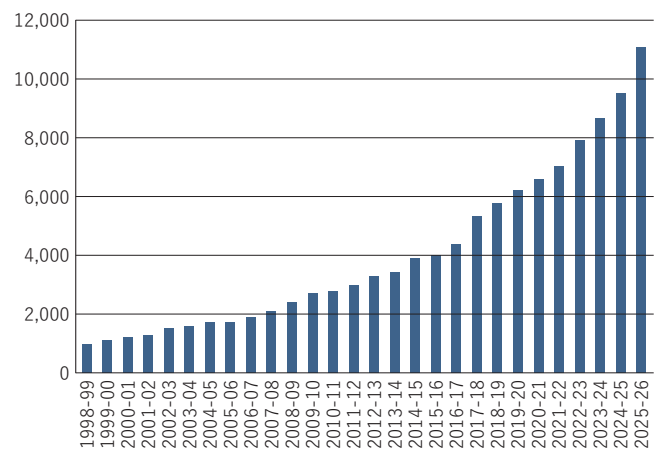


図1 1998-99年シーズンから2025-26年シーズンまでの鳥島のアホウドリ個体数の推移



アホウドリの親子



鳥島の初寝崎コロニーの様子



●アホウドリの準絶滅危惧種へのダウンリストに向けた達成状況

アホウドリは、環境省レッドリスト絶滅危惧II類（VU）に選定されています（環境省レッドリスト2026）。1万羽を回復しましたが、最大の繁殖地である鳥島は火山島であるため、絶滅危惧種から外れるには、繁殖地の状況が改善されることが必要です。国際的なアホウドリ保全チームが設定した準絶滅危惧種へのダウンリストの条件と現在の達成状況は以下のとおりです。

【準絶滅危惧種へのダウンリストの条件と達成状況】

条件	達成状況	詳細
① 繁殖するペア数合計750以上	○	鳥島で2,114ペアが繁殖しており、達成しています。
② 少なくとも3つのコロニー（島）で3年間の平均増加率が7年間以上にわたり6%以上である	△	鳥島、小笠原諸島鴛島、尖閣諸島南小島にそれぞれコロニーがあります。鳥島では、2008-09年シーズンから現在までの3年間平均増加率は9.2%で達成していますが、鴛島では毎年ヒナが巣立つものの、成鳥個体数は7年以上10羽前後で推移しており、増加率を算出できる段階にありません。さらに、尖閣諸島ではモニタリングが実施されていません。
③ 少なくとも2つのコロニーは鳥島以外にあり、最低50ペア以上の繁殖が各コロニーで見られる	△	鴛島での2025-26年シーズンの繁殖ペアは3、尖閣諸島は2022-23年シーズンに156ペアと推定されてます（Otsubo & Higuchi 2026）。鴛島での繁殖ペア数増加の取り組みが重要です。

アホウドリの絶滅危惧II類からのダウンリストの条件は、一部達成していますが、まだ道半ばです。達成に向けて、鳥島での良好な状態を維持しつつ、鴛島での保全活動を強化する必要があります。鴛島では、2023-24年シーズンから2025-26年シーズンにかけて3年連続で3ペアが繁殖するなど、着実に繁殖地復活への歩みを進めているところです。今後も継続した保全活動、モニタリングの実施が不可欠です。

また、近年、尖閣諸島のアホウドリは鳥島のアホウドリと別種レベルで異なることが判明しました。今後の課題として、それぞれの独自性を保つように保全する必要があり、ダウンリストへの条件も含めて、保全施策の再検討が必要です。山階鳥類研究所では、アホウドリが絶滅危惧種から外れることを目標に、鳥島、鴛島でのモニタリング、保全活動を継続し、これらの課題解決を目指します。

引用文献

Otsubo J & Higuchi H (2026) : Estimation of short-tailed albatross *Phoebastria albatrus* population on the Senkaku Islands using satellite images. *Endang Species Res* 59: esr01462. DOI: <https://doi.org/10.3354/esr01462>

環境省 (2026) : 第5次レッドデータブック : 絶滅のおそれのある日本の野生生物 鳥類. 環境省, 東京.

この件についてのお問い合わせ先 :

公益財団法人 山階鳥類研究所

千葉県我孫子市高野山115 電話 : 04-7182-1101

担当 : 広報 山岡 (Eメール : pressrelease@yamashina.or.jp)

・写真のデジタルデータをご希望の方もお問い合わせください。



◆アホウドリ (*Phoebastria albatrus*)

ミズナギドリ目アホウドリ科。特別天然記念物、国内希少野生動植物種(種の保存法、1993年指定)、絶滅危惧II類(環境省レッドリスト2026)(※近年、鳥島と尖閣諸島の個体群は別種として扱うべきことが明らかとなったが、学名の問題が解決されていないことは後述)。



●分布および個体数

- ・繁殖地は、日本の伊豆諸島鳥島(以下、鳥島)、小笠原諸島智島(以下、智島。再導入で確立された繁殖地)、尖閣諸島。
- ・非繁殖期には、北太平洋のベーリング海やアリューシャン列島、アラスカ沿岸まで移動する。
- ・1949年の調査で一度絶滅したと考えられたが、1951年に約10羽が鳥島で再発見された。1971年には尖閣諸島で少数の生息が再発見された。
- ・減少原因は、1890～1900年代に羽毛採取のために大量に捕獲されたことによる。
- ・保全活動の成果などもあり、現在個体数は鳥島で約11,067羽まで回復したと推定された(本文参照)。

●形態および生態

- ・成鳥は全長が84～94cm。
- ・成鳥は全体的に白く、風切羽や尾羽が黒い。頭部は淡黄色。ヒナから2歳ごろまでの若鳥は全身黒褐色で、成鳥羽になるまでは7～15年ほどかかる。
- ・繁殖期は10月～翌年5月。
- ・巣立ち後3～4年で巣立った場所に帰ってくる。5歳前後から繁殖に参加するが、巣立った場所で繁殖を行う傾向が強い。

◆鳥島のアホウドリ保護の歴史

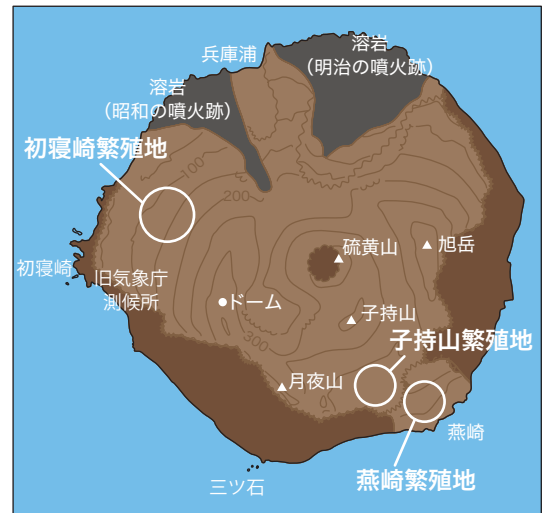
1951年1月に、鳥島の測候所職員により、断崖に囲まれた急斜面の燕崎にごく少数が生息しているのが再発見された。再発見後、測候所が閉鎖される1965年まで、職員による保護活動が行われ、成鳥50羽前後、ヒナ十数羽が巣立つまで回復した。測候所閉鎖後、保護活動は一時途絶えたが、1973年4月、イギリスの鳥類研究者ランス・ティッケル氏と山階鳥研の吉井正氏が鳥島を訪れ、24羽の巣立ちヒナを確認した。1970年代後半からは長谷川博氏(現東邦大学名誉教授)がアホウドリの研究に着手し、営巣地の地形が急峻なため土砂が流れ、卵やヒナが生き埋めになり、繁殖成功率が低くなっていることを発見した。これに基づき、環境庁(当時)と東京都が、燕崎営巣地の整備を1981年から開始した。整備直後の繁殖成功率は改善するものの、数年後に再び土砂が流れ、成功率が下がることが繰り返された。アホウドリの回復を軌道に乗せるには、より安全な繁殖地が必要であった。そこで、鳥島の西側にある緩斜面の初寝崎に、新たな繁殖地を作る試みを実施された。アホウドリは集団で繁殖する習性があるため、実物大の模型(デコイ)を設置し、音声を流すことで、繁殖個体を誘致する“デコイ作戦”が計画された。ここから山階鳥研も本格参入し、1991年の予備調査を経て、1992年からデコイ作戦が開始された。1995年秋、初めて1つがいが産卵し、翌年6月に1羽が無事に巣立った。その後、つがい数は増加し、2006年



春には13羽のヒナが巣立った。10羽以上のヒナが巣立ったことで、初寝崎に新たな集団繁殖地が形成されたと判断し、15年にわたるデコイ作戦は、成功裏に終了した。その後も初寝崎でのモニタリングや繁殖地整備は継続され、個体数は順調に増加。2026年3月には787羽のヒナが確認された。

現在、鳥島の中には、3か所の集団繁殖地(コロニー)がある。

- ・燕崎：1951年にアホウドリが再発見された時から続く従来からのコロニー。南東部の急斜面でほとんど砂だけの斜面に営巣する。堆積した火山性の土砂からなる表土がつねに流れ落ちているため、卵やヒナが巣から転がり出たり埋まったりする事故が多い。2026年3月には、558羽のヒナが確認された。



鳥島のコロニー

- ・初寝崎：島西部の草の生えた緩斜面に形成されたコロニー。デコイ(模型)と音声装置による誘引を1992年から実施し、1996年に初めてヒナが巣立った。2006年に13羽のヒナが巣立ったことで誘引装置の設置は終了した。表土が流れ落ちないなど環境条件がよく、繁殖成功率も安定している。30年を経た2026年3月には、787羽のヒナが確認された。



初寝崎コロニーの全景

- ・子持山：燕崎の西側に位置する礫地で2006年より自然に形成されたコロニー。燕崎に比べ緩斜面であるが、植生が少なく、繁殖成功率は安定していない。2026年3月には、246羽のヒナが確認された。

◆アホウドリの小笠原再導入

アホウドリの最大の繁殖地である鳥島は活火山であり、万一噴火があった場合には、アホウドリの個体群に大きな影響が出る可能性がある。もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は、繁殖状況の調査や保護活動を行うのが難しい現状である。このため、過去にアホウドリが繁殖していたことが知られている場所から1か所を選んで、アホウドリの営巣地を復活させることで、本種の復活を一層確実にすることが望ましいと考えられた。このため山階鳥類研究所では、生まれた場所に戻って繁殖するというアホウド



鳥島繁殖地



リの習性を利用して、ヒナの移送により小笠原群島聳島に繁殖地を作ることとした。2008～12年の5年間に合計70羽のアホウドリのヒナを鳥島から聳島に移送して人工飼育し、69羽を巣立たせた。聳島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、2011年からは人工飼育した個体の帰還が認められた。2012年11月14日には、2008年に巣立ちした人工飼育個体（色足環番号Y01、オス）と野生個体（足環なし、メス）の間に初めて産卵が確認され、2016年には同ペアから初めて巣立ちヒナが確認された。

今期のモニタリング調査では、2025年11月に3ペアの営巣と抱卵行動が観察され、2026年1月の調査において上記3ペアの3巣でヒナが誕生したことが確認された。ヒナは4月の調査においても巣内で活発に動き親鳥から給餌を受ける様子なども観察され、順調に生育していたことから、個体識別のための足環の装着を行った。また、モニタリング期間を通して、計12羽のアホウドリ成鳥（亜成鳥を含む）の飛来が確認された。

【聳島および周辺の島におけるこれまでのアホウドリの繁殖状況】

繁殖シーズン	聳島	媒島 (聳島から7km南)	嫁島 (聳島から22km南)
2012-13年	1卵（孵化せず）		
2013-14年	1卵（孵化せず）	1雛巣立ち	
2014-15年	1卵（孵化せず）	1卵（孵化せず）	
2015-16年	1雛巣立ち		1雛巣立ち
2016-17年	1雛巣立ち		
2017-18年	1雛巣立ち+1卵（孵化せず）		
2018-19年	1雛巣立ち+1卵（孵化せず）		
2019-20年	1雛巣立ち+1卵（孵化せず）		
2020-21年	1卵（孵化せず）		
2021-22年	2雛巣立ち		
2022-23年	2雛巣立ち前+1卵（孵化せず）		
2023-24年	3雛巣立ち		
2024-25年	3雛巣立ち		
2025-26年	3雛巣立ち		

*アホウドリは11月に産卵し、雛は翌年1月に孵化し5月に巣立つため、繁殖シーズンは年をまたぐ



聳島に帰還している人工飼育個体



若鳥2羽とデコイ（手前）



ヒナ



◆尖閣諸島のアホウドリ

従来同種と考えられてきた、鳥島と尖閣諸島に由来するアホウドリは、近年、遺伝的・生態的・形態的な違いから別種と考えるのが妥当という結論が得られており、両者は、それぞれの独自性を保つように保全していくべきと考えられる。このため、アホウドリはこれまで考えられてきたより希少な種となり、二つの個体群の実態解明を急ぐとともに、引き続き動向をモニタリングする必要がある。ただし、アホウドリの学名 *Phoebastria albatrus* は尖閣諸島に由来するアホウドリが引き継ぐこととなり、鳥島に由来するアホウドリの学名は未確定で、学名の問題が未解決である (Yamasaki et al. 2022, 日本鳥学会 2024)。今後も鳥島の個体群 (「アホウドリ」) についてモニタリングを継続するとともに、20年以上調査が行われていない尖閣諸島の個体群 (「センカクアホウドリ」) の現状について早急な調査の実施が望まれる。

「アホウドリ」と「センカクアホウドリ」を2種と考えるべきことについては下記プレスリリースを参照。特別天然記念物・アホウドリに2種が含まれることを解明(北海道大学・山階鳥類研究所2020年11月20日)

https://www.yamashina.or.jp/hp/p_release/images/20201120_prelease.pdf

◆アホウドリマンスリーサポーターの募集

山階鳥研では絶滅危惧種アホウドリの状況のモニタリング (経過観察) や保全のため、ご支援いただくマンスリーサポーター (500円/月) を募集しています。

あなたの寄附でアホウドリを復活へ

<https://www.yamashina.or.jp/albatross/kifu.html>

アホウドリの研究・保全活動は、1970年代から、研究者の自弁や、各種の助成金、科研費、公的予算、さらに多くの協力者の力により継続されてきました。近年は、山階鳥研が主に環境省と東京都の予算によって、毎年、伊豆諸島鳥島と小笠原諸島聳島で標識調査やモニタリングを含む保全活動を行ってきました。特に、最大の繁殖地である伊豆諸島の鳥島で毎年孵化するすべてのヒナに個体識別用の足環を装着する作業が半世紀以上にわたって行われてきたことは、アホウドリという数十年も生きる長寿の種の、現在と今後の保全のための判断に不可欠な情報を与えているきわめて重要な蓄積になっています。しかし、保全活動と研究のために支出されてきた公的予算は、他の絶滅危惧種とのバランスの考慮などの理由から、大幅に縮小され、これらの活動の継続が困難になっています。このことは、上記のほぼ半世紀にわたる蓄積が失われることを意味し、われわれはアホウドリを本当に絶滅危惧種から救い出すための大きなよりどころとなる判断材料を失うこととなります。山階鳥研では、アホウドリが絶滅危惧種の指定から外れる日を目指し、活動を継続します。ご支援のほど、よろしくお願いいたします。

